**知られざる世界　「過去編」　　・・・目　次**

1. **ＵＦＯ**（2021年1月掲載）
2. **三次元テレビ** （　　〃　　　1月掲載）

１・　人造人間　　　　　　　　　　　　　（　　〃　　　 1月掲載　）

２．　日蓮　　　　　　　　　　　　　　 　（ 　〃　　 2月掲載予定）

1. **アトランティス**

１．　三度目の招待

２．　アトランティスの教師

３．　見学旅行

４．　エジプトへ

５．　アトランティスの最後

1. **バビロニア**
2. **ベツレヘム**

**１，ＵＦＯ**

**季節の移ろいは早く、暑すぎた夏もいつの間にか去り、今は秋も深まりかなり肌寒い時節になってきた。**

**そのような時節に、私の心の中では相反するような思考が**

**せめぎ合っていた。**

**この数年、いつ終わるともしれないこの構想は続いている。**

**片方の声は、頭の中でこう言う。**

**（金や賞賛、高い地位や名誉を放棄して人生に何の楽しみがあるのだろう善を褒め称えて何の得になるのだろうか？物質的金銭的満足を得て、名声も得るべきである・・）**

**もう一方の声はこう言う。**

**（生命の源も自然のエネルギーも天からの恵みものなのだ。天の望みは、人間が利他業に徹し、争いも飢えも無い平等で平安な世界を作る事なのだ。**

**だから、物質文明と利己的思想の虜になってはならない。）**

**ただこの葛藤は、私個人だけではないようだ。**

**世の中の思考も、二分化してきているようだ。**

**ただし外面上、私の生活は何ら変わってはいない。**

**名も無い一商売人として平凡な生活を送っている。**

**少し気になる事と言えば、進化した異星人はいる可能性がある云々の情報が多くなってきてはいる。**

**そしてＵＦＯの目撃事件・情報も多くはなってきている。**

**宇宙人のタイプも様々あるそうで、巨人タイプ、小びとタイプ、地球人タイプ等々。**

**地球人タイプの中には、　地球人の祖先にあたる異星人がいるという話もある。**

**ＵＦＯ事件はこの日本でも多くなっている。**

**何人かの人々は、テレパシー等で円盤を呼び寄せるという。**

**しかし、今の私に何の力があるというのだろう。**

**晩秋のある日、私はいつになく早く目が覚めた。**

**（このさむさからすると、初雪が蝦夷富士に降るかもしれない）**

**私は、テラスに下りてみた。**

**山の頂は白く雪化粧をし、麓は霞がかかって水墨画を見るような景色が展開されていた。**

**気ぜわしい毎日に追われていた私は安らぎを感じると共に、何時になく感傷的な気分に浸り始めた。**

**そして、朝日の紅が抜けきらぬ大空に目を向けた。**

**私の心は、遠くに虹を期待する子供のように、まだ観ぬ何かへの憧れを抱き始めた。５分ほどじっとしていたが、やはり何事も起きなかった。**

**部屋に戻ろうとして後ろを振り向きかけた時、空の色彩とは異なった色が見えた様な気がした。**

**西の山陰からそれは動いて来た。**

**金属的にキラキラと輝き、時折色々な色彩を発し、霞に不思議なコントラストを添えていた。**

**人工美の芸術品は、自然美を汚すこと無く、音も無くぐんぐんと近づいて来た。**

**私は全く身動ぎ出来ず、それをただ見つめていた。**

**それは、あっという間にテラスの前にやって来た。**

**地上から５～６メートルの高さで空中に留まると、どこにも穴など見えなかった底部の真ん中辺りが丸く開いて、薄紫がかった半透明の黄泉が地上に届いた。**

**私がその物に気付いてから、まさに電光石火の早業であった。**

**白っぽいシルクのような生地の上着を着た西洋人らしき人が、金髪をなびかせながら光の柱の中から降りてきた。**

**人間そっくりであるが、地球人がこんな所から出てくるはずは無いと思った。**

**彼は地上に着くと、５～６歩こちらに歩いてきて、訛りのある日本語でこう言った。**

**「早くこちらに来てください、人に見られると貴方に迷惑が及びます。」**

**内心何かを待ち望んでいたので、心は期待で満たされたが、異常な緊張感と**

**恐怖心も沸き起こってきた。**

**テラスの階段を降りようとした時、危うく足を踏み外しそうになった。**

**あまりに急な出来事のため我を忘れていたのか、自分の足が何処を歩いているのかわからない状態だった。**

**彼は、微笑みながらこう言った。**

**「恐れることも心配することもありません。私達はあなた方の祖先です。」**

**浮き足だった足で何とかそこまで行くと、彼は光の円の方へ私を案内した。**

**先にその光の中に入ると、全身が上方に引っ張られた。**

**エレベーターの場合には、先ず足が上へ持ち上げられる感じであるが、その光線の中では頭も手も足も全身が同時に引き上げられる感じなのである。**

**すぐ後を彼も上がってきた。**

**内部に引き込まれる時に上方を見たが、吸引ビームはその部屋の天井から発せられていた。**

**彼が私の高さまでやってくる少しの間、船の内部の空間に浮かんでいた。**

**彼が私の高さまでやってくると、内部の床の穴は音も無く閉じた。**

**いや、閉じると言うより床が現れたのである。**

**閉じた場所には、何処にも継ぎ目らしきものが見当らなかった。**

**二人は空間から床に静かに下ろされた。**

**この部屋をくるりと見渡すと、あまり大きくは無く何処にもドアらしき物が見当ら無かった。**

**ただ四方にパネルやスイッチが有るだけである。**

**不思議に思い彼に尋ねた。**

**「なぜ入り口が無いのですか？それに、今の出入り口はどの様に閉じたのですか？」**

**「形状記憶合金をご存じですね、あれを発展させた物なのです。この合金は、アルミニュームよりも軽く、何倍も丈夫なのです。」**

**「その様な金属は地球には無いはず？」**

**「貴方が内心感じている様に、外宇宙からのものです。しかし、これと同じような物は一万年も前に我々の祖先が完成させていました・・当時の光子ロケットやレザースペース船は実験機の段階でしたが・・」**

**彼は有るパネルのボタンを押した。**

**音も無く生殖ドアは開き、我々が通り過ぎると音も無く閉じた。**

**その部屋は一見すると何も無く、パネルとボタンだけの部屋のようだった。**

**よく見ると、床に３メートル四方くらいのパネル状のものが置いてあった。**

**そしてその真上の２メートル位の低い天井にも同じような物が張り付いて有った。**

**私は内心思った。**

**（こんな物を置くだけの部屋なのだろうか？）**

**「いいえ、全く違います。」**

**彼は、私の心を読んだかのように答え始めた。**

**「三次元ＴＶをお見せする部屋なのです・・普通のＴＶは平面に画像を映すだけですが、このＴＶは縦横高さを持つ立体画面なのです。」**

**「？・・・縦横高さを持つ画面というと、現実になってしまうのでは無いか？」**

**「そうです、現実と同じです。違うところは、画面に手を入れると、中の物が**

**掴めないという事です。しかも、過去ＴＶとなっています。過去の希望の**

**場所と年代をインプットすると、その時のその場所が三次元で映し出される**

**のです・・・その前に、ＵＦＯを少し上空に引き上げます。１００メートルも**

**引き上げておけば安心です。」**

**「その高さでは下界の人間に見えるのでは？」**

**「光遮蔽スクリーンをオンにします。これで如何なる方向からも見えません。」**

**その後私には、引き上げられる感覚は全くなかった。**

**２，三次元ＴＶ**

**一、人造人間**

**この何も無い空間から何かが始まるとは信じられない気がしたが、彼は微笑みな**

**がら操作を始めた。**

**「まず、今現在起こっている事の一つを映します・・もうこんな事が地球上では起きているのです」**

**・・見詰める画面が・・いや空間がだんだんと薄暗くなってゆき、やがて少し明るくなった。やや紫色の蛍光灯の明かりに照らされた長い廊下が映し出された。**

**白衣を着た医者か科学者と思われる五十代ぐらいの男性が二人、ひそひそと話をしながらあちら側に歩いて行く。**

**きれいな英国英語をうつむき加減で喋っているのだが、余り良い話題では無さそうだ。**

**内輪話のようにひそひそと話す様子からして分かる。**

**私の目に映るその場面の様子は、家の窓を通し家の外を眺める感覚そのものだった。**

**突然、その話が日本語との２カ国語放送になった。**

**（？どうしたのだろう、私の感覚が冴えたのだろうか？）**

**話の内容は、奇妙なものだった。**

**「すぐに溶液に浸しておかなければ人工皮膚が直ぐに死んでしまう。」**

**「それではやはり、全器官血液循環式にすべきだったという事ですか？」**

**「それがまた問題だ、人工心臓と人工肺は小型化に成功したが、思ってもみない問題が出てきた。」**

**「機能的にまだ問題があるという事ですか？」**

**「・・その為、言葉や目の動きに欠落がある・・脳性麻痺の患者を思わせる。」**

**彼らは、右側の或ドアの前で立ち止まった。**

**沢山の数字や記号の書かれたパネルがあり、そのボタンを１０カ所ちかくも**

**押すとやっとドアが開いた。**

**直ぐにそのドアを閉じ、少し歩くと直ぐに又頑丈なドアがあった。**

**そこでは、光を発する小道具をとりだして、穴に光線を投げ込んだ。**

**そこが開くと又直ぐにそれを閉じ、今度はジュラルミン製のやや小さな部屋に**

**達した。**

**そこは普通の鍵で開けると、やっと何かを覆うスクリーンが見えた。**

**ここまで彼らは来ると、ほっと安堵のため息をついた。**

**それにしても、何という念の入れ方だろうか。**

**一人がスクリーンの向こうに行くと、親しげに話しかけた。**

**「博士、まぶたと唇の調子はどうですか？」**

**（何だ、患者か・・でも、まぶたと唇の調子とはどういう事だろう？）**

**その博士は、なかなか答えなかった。**

**「・・・・ＦＩ・・・ＡＤ・・・」**

**「ＢＡＤですね、発音出来る器官は舌だけですから大変なのはよく分かります。」**

**ここで、もう一人がスクリーンを半分ほど開いた。**

**（！これは一体何だ？骸骨か、いや、それより少しましだ、**

**、まぶたと唇らしきものがある！）**

**私が見たものは、金属的骨組みに人工皮膚を貼り付けた人体に似た物体だった。**

**白衣の一人が言った。**

**「貴方が実験は成功だと言葉を発した時、我々は、今世紀最高の医学的成功だと思いました。暑さ、寒さ、痛み、快感の機能を付加することは将来的にも難しいという事は、あなたもおっしゃっていましたので、その点は了承されている事と思います。」**

**「・・あらしはいくいている・・それらけできせきら・・か、にくらいのどれいら・・」**

**白衣の一人が、通訳もかねてこう言った。**

**「私は生きている、それだけで奇跡だ・・とおっしゃるのですね、私もそう思います。しかし、肉体の奴隷だとは・・何故その様な事をおっしゃるのですか？」**

**後ろの白衣の一人がここで口を挟んだ。**

**「脳を移植し、手足の電動筋肉と脳の神経繊維の接続に成功した時は、脳医学の偉大な勝利だと思いました。脳の電気パルスを手足の人造神経に伝えて動かすことは長年の夢でした。**

**あなたは、現代医学の偉大な勝利です。」**

**「ご覧になってどう感じましたか？」**

**私の後ろから、労るような声が聞こえてきた。**

**「驚いたでしょうが、今現在現実に起こっていることなのです・・ここでサイボーグの本心をテレパシーで読み取ってみましょう。」**

**彼は別の部屋に出て行くと、少ししてから帰ってきた。**

**手には野球ボールほどの大きさの石を持っていた。**

**それを私の眉間の辺りに置くと、ある種の生命力が注入されるような感覚を**

**覚えた。**

**「この石は、宇宙エネルギーを蓄えることが出来ます。ラジュームに近い構造です。**

**脳内の超感覚を活性化するのです・・さあ、サイボーグの顔をじっと見て下さい。」**

**私は言われた通りに、人造人間の顔の辺りを眺め始めた。**

**・・・最初私の耳には、多くのざわめきが聞こえた。**

**そのうち、段々とある声が形を整え始めた。**

**（・・苦しい！・・苦しい！・・・不治の病から目覚めた時、私はこうして生きている事に気付いた。あの時は、最高の喜びを感じた・・だが、この溶液の箱から１０分間ほど離れる事だけが私の生活範囲とは・・・家族が面会に来ることをどれ程楽しみに待ったことか・・しかし、息子と妻が私の顔を見た時、恐怖と驚きの入り交じった複雑な顔を見せた・・だが、話をしていくうちに、私だと確かに認めてくれた。**

**やはり家族だ・・・友人の科学者は、私ソックリの顔を創りますと言って家族を慰めていたが、顔を似せても結局同じ事だ。**

**牢獄に閉じ込められた私を、とても悲しんでいた。**

**そして、暑さ寒さを感じないこの私を、心から哀れんでいる目をしながら帰っていった。病で苦しんだ肉体の牢獄から解放された途端、サイボーグの牢獄に閉じ込められた・・・脳が死なない限り、この状態のまま永遠に生き長らえる事になるのか？・・この苦しみが永遠に続くとは、何という事か！これぞ地獄の最たるものだ・・・自らサイボーグを希望した手前、死にたいとは如何しても言えない・・・誰か、助けてくれ！）**

**彼の心をテレパシーで感知していた私も、耐えきれない嫌な気持ちになってきた。**

**「如何でしたか？・・自然の摂理を変える事は難しい事です。」**

**「・・ところで、先ほど突然英語が訳されて聞こえて来ましたが、如何したので**

**しょうか？」**

**「同時通訳期のスイッチを入れたのです。これは、ほとんどの言語を百聞の一秒の早さで翻訳し発生するのです・・さて、この場面はもう十分でしょう。では別の時代に参りましょう。**

**次の事実は、我々の先祖が関係したある事件です。」**

**私は操作盤類をじっと見ていたが、七〇〇年余りの時を遡りダイアルをセットしたように思われた。**

**令和２年１２月２５日現在、世界はコロナウイルスの件で席巻されている。**

**こういう事態は確かに試練である。**

**この事が収束し元の状況に戻ったなら、世界は元のように推移するのだろうか？。**

**私の考えであるが、これはこれから起こる異変の一つに過ぎないと考えている。**

**さらなる異変に耐えながら生きていかねばならないとすると、我々人類は思う**

**以上に大変な世界に生きているという事になる。こういう混沌とした時代において、**

**この小説にこれからの厳しい時代を生きる上で何らかのプラスになるものを**

**見出して頂けるならば幸いである。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　筆筆者　宍戸　庸一**